

Future Design

Vol 9

特集

学びを支える想い、教員の本音とは。

教員インタビュー

活動報告

FIT-join の活動を ピックアップ！

新入生オリエンテーション / 交流会
学生アンケート / Join-Talks



目次

Contents

- P.2 目次・FIT-joinとは
- P.3 代表挨拶・メンバー紹介
- P.4 ■ 特集
教員インタビュー
- P.12 活動報告
 - ・ 学生アンケート
 - ・ 新入生オリエンテーション
 - ・ Join-Talks
 - ・ 交流会
- p.18 アルバム

FIT-joinとは

FIT-joinは本学の教育改善を学生の視点から教職員と共に考えることで本学の「学びのコミュニティづくり」の役割を担っている団体です。

私たちは学生の本音を吸収し、学生が感じていることを教職員に伝えるとともに、教職員が考えていることや課題を学生の視点から考え、学生に伝えることで教職員と学生をつなぐ架け橋として活動しています。今年には教職員と学生、学生と学生のつながりについて考え、そのテーマに沿った活動に取り組みました。



主な活動

2025年度は以下の活動を行いました。

- ・ 新入生オリエンテーション
- ・ 学生アンケート
- ・ 交流会（BBQ）
- ・ 委任状交付
- ・ 湯布院研修
- ・ FD Café
- ・ 立花祭出店
- ・ FITプレセミナー
- ・ 教員インタビュー
- ・ Join-Talks

代表挨拶



2025年度FIT-join代表

板屋 こころ

(情報工学科 3年)

FIT-joinとは、本学の学生・教員・職員の3者を繋ぐことで、「学びのコミュニティ」を作る活動を行っている団体です。メンバーは約50名で構成されており、福工大生の学びの環境をより充実したものにしたいという思いを持って活動を行っています。新入生オリエンテーションや学生アンケート、Join-Talksなど、様々な企画を立案し、運営しています。また、今年度からは新たに交流会チームを発足し、メンバー内外で交流も盛んに行えるような活動を行っています。今後も学生のみなさんが学生生活を充実できるような企画やイベントを検討していきます。FIT-joinの活動へのご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。

メンバー紹介

●幹部

- ・代 表：板屋 こころ (情報工学科3年)
- ・副代表：三橋 満咲 (電気工学科3年) ・谷口 寛太 (社会環境学科4年)
- ・副代表：有澤 優菜 (情報工学科2年) ・砂原 樹羅 (情報工学科3年)
- ・副代表：指方 真羽人 (電気工学科2年)



●メンバー

- | | | |
|---------------------|------------------------|------------------------|
| ・ 廣田 雄大 (生命環境化学科2年) | ・ 源田 湧士 (情報工学科1年) | ・ 渡邊 竣介 (システムマネジメント3年) |
| ・ 白井 唯菜 (生命環境化学科1年) | ・ 村上 雄飛 (情報通信工学科2年) | ・ 工藤 心晴 (社会環境学科2年) |
| ・ 大塚 佳知 (知能機械工学科3年) | ・ 福田 姫花 (情報通信工学科1年) | ・ 佐藤 光志朗 (社会環境学科2年) |
| ・ 山口 健太 (知能機械工学科1年) | ・ 主税 青 (情報通信工学科1年) | ・ 藤田 悠也 (社会環境学科2年) |
| ・ 島田 晃紀 (電気工学科2年) | ・ 川上 起采 (情報通信工学科1年) | ・ 山本 幸輝 (社会環境学科2年) |
| ・ 桃崎 圭志 (電気工学科2年) | ・ 矢野 寿騎 (情報通信工学科1年) | ・ 武満 蓮 (社会環境学科1年) |
| ・ 王丸 蓮 (情報工学科3年) | ・ 角田 幸太郎 (情報通信工学科1年) | ・ 辻田 敬梧 (知能機械工学専攻2年) |
| ・ 正崎 起士 (情報工学科3年) | ・ 中園 巧人 (情報システム工学科2年) | ・ 坂本 康汰 (知能機械工学専攻1年) |
| ・ 宮崎 桜花 (情報工学科3年) | ・ 進藤 詠太 (情報システム工学科1年) | ・ 千賀 英 (電気工学専攻1年) |
| ・ 鬼木 駈空 (情報工学科3年) | ・ 山岸 俐駈 (情報システム工学科1年) | ・ 高城 凜 (電気工学専攻1年) |
| ・ 田代 敦士 (情報工学科3年) | ・ 山口 晴也 (システムマネジメント3年) | ・ 高木 真理奈 (電気工学専攻1年) |
| ・ 米森 一真 (情報工学科3年) | | |
| ・ 大石 隼士 (情報工学科2年) | | |
| ・ 嶋林 由芽 (情報工学科2年) | | |
| ・ 井上 満瑠 (情報工学科2年) | | |
| ・ 蒔田 佳典 (情報工学科2年) | | |
| ・ 下竹 楓 (情報工学科1年) | | |
| ・ 古賀 捷克 (情報工学科1年) | | |
| ・ 深野 純平 (情報工学科1年) | | |
| ・ 目取眞 晴 (情報工学科1年) | | |

※在籍者情報は2026年2月1日時点でのものです。



工学部 電気工学科

大山 和宏教授

研究分野：電気機器、パワーエレクトロニクス

主な担当科目：電気工学概論、エンジニアリングデザインⅠ・Ⅱ
電気機器Ⅰ・Ⅱ

1 Q 授業をする際に大切にしていることは何ですか？

A 限られた授業時間を最大限に活用し、学生一人ひとりが最低限の知識を身につけられることを大切にしています。特に、必要最低限の紙と鉛筆だけで授業が受けられるように工夫しています。また、聞いた内容がその場限りにならないよう、学生が他者に説明できるレベルになるまで記憶が残る授業づくりを意識しています。

2 Q 授業構成を考える際にどのような工夫をしていますか？

A 15回の授業全体を通して無理なく学べるように設計することを重視しています。また、他の科目のテスト週と重ならず、この授業のテスト勉強だけに集中できるよう、中間テストは行わず、13回目の授業の中で期末試験を実施し、14回目の授業で解答と解説をするようにしています。こうした工夫によって授業内容がきちんと身につく、学びが将来に活かされることを目指しています。

3 Q どのようなことを研究されていますか？また、その分野を志された理由は何ですか？

A 電気機器や電力変換装置の制御技術を中心に研究に取り組んでいます。この分野は「パワーエレクトロニクス」と呼ばれ、電力を効率的に変換・制御する技術であり、応用範囲が非常に広いのが特徴です。産業機器や自動車、再生可能エネルギー分野など、多様な領域で活用される可能性を持っています。また、企業との共同研究を積極的に行うことで、理論研究と実用化の両面を結びつけています。研究室では、基礎理論の探究と応用技術の開発を並行して進めています。学生さんにとっても、学んだ知識が社会に直結する実感を得やすい分野で、広く応用される技術を追求することが研究の魅力です。

この分野を志した理由は特になく、与えられた人生の流れに身を任せて今に至っています。私が学生だった時は古臭い分野で人気がありませんでしたが、最近この分野は社会的意義が大きくなり注目されるようになってきました。何かしらのお導きがあったのかなぁと思います。

4 Q 研究での苦勞とその後に得られる喜びは何ですか？

A 研究活動では、論文執筆や成果発表に伴う厳しさが常につきまといます。特に、競争の激しい分野ではライバルが多く、ライバルたちを凌駕する研究成果を示すことが求められるため気が休まらないです。しかしながら、単なる競争ではなく社会的な意義を意識し、しっかりとした目的意識を持って研究を進めることが大切であると思います。研究を通じて何の目的をもって何ができるようになったかを自分自身に問い直すその過程で苦勞の意味が見えてきて、研究の本質的な喜びにつながります。成果が認められたときの達成感は努力を続けてきた者だけが味わえるものです。

5 Q 学生にはどのような姿勢で授業や研究に励んで欲しいですか？

A 授業では単位を取ることを第一に、基本的な知識や考え方を身につけられれば良いと思います。そのうえで、授業で得た知識を基に興味のむくままに、研究に向き合って欲しいと思っています。学生さんにはぜひ、一生懸命取り組む姿勢を大切に、好きなことを探求して欲しいと考えています。

6 Q 就職や大学院進学に関しての独自の取り組みはありますか？

A 進路に関しては、積極的に大学院に進学して欲しいと考えています。大学院では、研究開発力やリーダーシップを育成することが重視されていて、研究を深めるだけでなく、社会に出てから必要となる能力を養う場にもなっています。学生さんが自らの適性を見極め、進路選択に役立つような支援を行い、また、学生さん一人ひとりの成長を見守り、適切な進路を選べるよう導くことが指導教員の役割であると考えています。その一環として大学院についての理解促進の場の提供や、企業の方に来ていただき講演会を開催するなどの取り組みを行っています。学生さんにとって魅力的な就職先との橋渡しになればと思っています。

7 Q 学生にはどのような社会人になり どのように社会に貢献してほしい ですか？

A 学生一人ひとり個性があると思いますが、その個性を活かし、同じ型にはまらない社会人になってほしいです。それぞれが真面目に働き、自分の得意分野で貢献することが社会の発展につながると思います。また、自分のことだけでなく周囲にも目を向ける「ボランティア精神」を持ち、社会の中で協調しながら自分らしくいられる人になってほしいです。

8 Q 子供の頃の夢は何ですか？

A 色々ありました。小学生のころは、思いつきでころころ変わり、恐竜が好きで考古学者になりたいと思ったり、絵を描くのが好きで画家になりたいと思ったり、頭が良くなりたくて東大の先生になりたいと思ったり、魚つりが好きで水族館の飼育係になりたいと思ったこともありました。中学校のころは、漫画家を目指していましたが、高校のころは、工業デザイナーのような芸術系の世界に進みたいと思っていました。すべての夢は叶わず受験直前で、当時は電気系が花形な時代で、バイクや自動車に興味があったこともあり、将来モビリティは電化していくだろうと予測して、電気系の道に進むことを決めました。

9 Q 学生時代に頑張ったことは何ですか？

A 子供時代は頑張ったというよりとにかく遊んでいました。小学校では通知表で1を取ったことがあるくらい、先生が手を焼くくらいの劣等児だったと思います。それでも中学高校では気持ちを切り替え、しっかりと勉強に励みました。大学時代は勉強だけでなく、部活動も頑張りました。

10 Q 尊敬している人は誰ですか？

A 父親です。父はとても誠実で、一生懸命働き生きる背中を見せてくれました。また、特定の人物ではないですが、日本の歴史に登場するような偉人たちにも敬意を抱いています。彼らのおかげで今の日本があると思います。人は皆生きている間に何かしら尊敬されることをしていると思いますし、私自身も特別な偉業を成し遂げていなくても、周囲から尊敬される人間になりたいです。

11 Q 座右の銘は何ですか？

A 明日できることは明日やる。人生無理はしないことです。これは若い人はマネしないでください。

12 Q 最近嬉しかった出来事がありますか？

A 電気工学科のエンジニアリングデザインⅡという科目で出場した自作の電気自動車の競技大会で、学生が全国3位に入賞したことです。

13 Q 趣味や今はまっていることは ありますか？

A 近い過去では自動車やカーオーディオのカスタマイズにはまっていた。最近はこれといったものはありませんが、健康のために運動をしないといけないのでソフトボールをしています。

14 Q 最後に学生に向けて一言お願いします。

A 人生は本当にあっという間ですので一生懸命に今ある時間を大切に人生を送ってほしいと思います。

感想

電気工学科2年 指方 真羽人

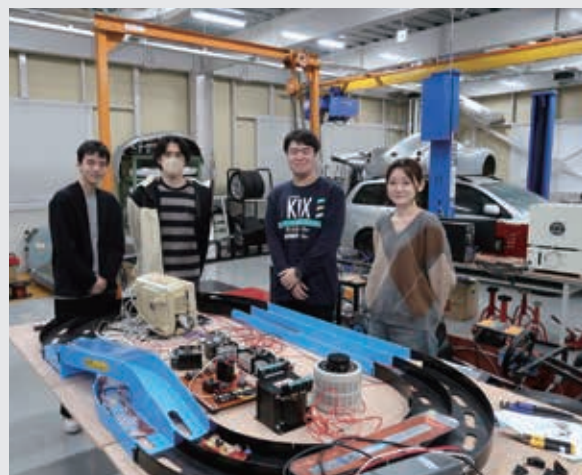
今回インタビューに伺った先生は普段から講義等でお世話になっていたものの、先生の学生に対する想いや人生観などについて伺ったことは今までになかったため、とても新鮮であったとともに、講義一つをとっても先生は学生のことを一番に想っておられるということを実感した。また、インタビューを通して自身の価値観がより広がったと感ずることができ、貴重な経験となった。

情報通信工学科1年 主税 青

今回のインタビューを通して、大山先生は学生の成長を第一に考え、授業では本質を理解させる工夫や学びやすさへの配慮を大切にしていることが分かりました。また研究では、社会的意義や目的意識を軸に挑み、成果を得る喜びを語っていました。私自身も今後の学びの本質を大切に、目的意識を持って挑戦し続けたいと思いました。

情報工学部 情報工学科1年 下竹 楓

授業には多くの工夫が見られ、学生のことをよく考えた授業をされていると感じました。大山先生がおっしゃっていたように、私も今後の時間を意味のあるものにしていきたいです。



情報工学部・情報工学科

柏 浩司 教授

研究分野：量子力学

主な担当科目：基礎物理学、物理学Ⅰ・Ⅱ、基礎電磁気学、
情報物理学

1 Q 授業をする際に大切にしていることは何ですか？

A 論理体系を理解させることをメインにしているので、最低限の情報を出して学生自身で考えさせるようにしています。あまり情報を出すと覚えるだけになり意味がないので。大学では、与えられた情報を元に考えてから応用する勉強をする必要があるので、できる限り学生自身で考えさせています。

2 Q 物理学を教えるきっかけは何ですか？

A 物理の分野によりますが、私の研究している素粒子物理学は直接的に社会の役には立ちにくいので、物理を教えることで社会還元をしたかったというのが理由です。例えば、ファインマンという素粒子物理学に大きく貢献した有名な学者がいました。その人もいろいろ誘いがあっても教育が出来る大学から離れませんでした。この例からも分かるように、物理を研究する上で教えるというのは非常に大切だと思っています。

3 Q 「素粒子、ハドロン、原子核理論」について研究する理由は何ですか？

A 原子核理論は役に立つところが想像しやすく、核分裂や核融合等エネルギー分野で役立っていると思います。一方、素粒子、ハドロンはなかなかすぐに役に立つとは言えません。私は「万物は何でできているのか」という古代ギリシャから続いている問いについて追いかけて続けているのが素粒子やハドロンの分野というイメージを持っています。ですので、この世界の最も根源的なところを知りたいというのが研究する理由と思っています。

4 Q 物理学は社会にとってどのような存在でどのような影響を与えていると思いますか？

A 素粒子などの現在研究が追い付いていない部分はまだまだわかりませんが、この世界は物理法則の上に成り立っています。なので出来る事、出来ない事すべてが物理学で定まります。そういった意味で物理学は現代社会において根底にあると思います。また、物理学を理解しておくことで、避けられる嘘の情報もあるので、ある種の騙されないためのセキュリティになってくれるという観点もあると思います。

5 Q 技術進化、分野研究によって期待される効果は何だと思えますか？

A 正直、ないです。私が研究している物理学は「すごく重い星の内部がどのようなになるか」「宇宙が生まれた3分後の世界」などの話ですぐに役立つことはあまりないかもしれませんが、物理で使われる計算方法やアルゴリズムが他の分野で応用されて数千、数万年後くらいに役立つこともあり得るので、間接的に社会に貢献できると考えています。

6 Q 情報工学科の学生が物理を学ぶ意義は何だと思えますか？

A やはり物理法則は根本的な知識のため、勉強すべきです。特に情報工学だとモデル化が重要で、身近で対象が幅広い物理学ではモデル化を理解するトレーニングになると思います。また物理学を知っておくと、カルト的な情報に疑問を持ち「リスクを避ける」ことができるので、そこも理由の一つです。また、物理学は古代ギリシャやイタリアなど様々な場所に源流がある学問なので、哲学を学ぶことも踏まえて勉強してほしいです。

7 Q 先生の趣味や毎日やっていらっしゃることを教えてください。

A 毎日やっていることは特に思い浮かばないんですが、最近の趣味だと、刀装具という日本刀の飾りがあって、目貫（めぬき）とか、鐔（つば）とかを軽く集めているくらいですかね。日本刀も持っているんだけど、数が多くなると保管が大変なので。

8 Q 子供の頃の夢を教えてください。

A 幼いときは、銀行員になりたかった記憶があるんですよ。父親が会社の経理をやっていて、たまに家に仕事をもち帰ってそろばんを弾いていたので、なんとなく金融系を思い浮かべてたんだと思います。ロボットやロケットの方に興味がでて、気づいたらそれにも興味なくして、最終的に素粒子に入ったという感じですね。

9 Q 先生の座右の銘や常に心に留めている言葉を教えてください。

A 一番好きなのは、ルソーの書いたエミールという本の中にある一文で、我々は弱いものとして生まれるから始まる一説ですね。「我々は弱いものとして生まれ、力を必要とする。我々は一つもたないで生まれ、助けを必要とする。我々は愚かなものとして生まれ、判断力を必要とする。生まれるときにはもたず、大人になって必要なすべてを、我々は教育によっては与えられる」という言葉があるんです。260年くらい前の教育の本で、いろんな日本語訳があって、名言が書いてあって、当然今では当てはまらないものもたくさん書いてあるんだけど、それが一番好きですね。

10 Q 学生時代に力を入れていたことを教えてください。

A 大学の時とかも特に何かに力を入れた記憶があんまりなくて、サークルにも入らないまま4年過ぎて、気づいたら今になってるんだけど、単発のバイトを少ししてたくらいで、ゆっくりすることに力を入れてたかな。まあ一応勉強はやってたからね。勉強はというか、物理の勉強はという。そんな感じですかね。

11 Q 就職や大学院進学といった、学生のキャリア形成についての先生の取り組みや指導方針を教えてください。

A キャリアについては、まず学生に自分で考えてもらうことを基本にしています。就職については専門の就職課がありますから、そちらに相談するよう案内していますし、大学院に進みたいという学生には個別に話を聞くようにしています。こちらから強く誘導したり、必要以上に背中を押したりすることはしないようにしています。あくまで学生の意思を尊重したいので、そのサポート役という立場ですね。大学院進学を希望する学生については、研究の姿勢や適性も含めて、少し丁寧に話すことが多いです。単に「行きたい」ではなくて、「なぜ行きたいのか」とか、「何を研究したいのか」とか、そういった部分を一緒になって整理する感じです。自分で判断して進路を選ぶことが大事だと思っています。

12 Q 学生に大学生活で特に学んでほしいこと、経験してほしいことは何ですか？

A あえて「何もしない時間」をつくることをおすすめしたいです。散歩でもいいし、ぼーっとする時間でもいいんですけど、そういう余白の時間って、思考が整理されたり、新しいアイデアが出てきたりするんですよ。詰め込みすぎないことも大切です。情報工学科の学生の場合は、物理を学ぶ意義というのがいろいろあって、例えばゲーム制作でモデルを扱うときにも役に立つし、数学的な基礎力を養うのにも役立ちます。それから、物理的な考え方というのは、技術的な判断ミスを減らす意味でも重要なんですよ。なので、目に見える応用だけでなく、基礎を身につける価値を感じてもらえたらいいなと思っています。



13 Q 最後に、今を生きる学生たちへメッセージをお願いします。

A あまり勉強ばかりに偏らずに、遊びや休む時間も大事にしてほしいですね。いろんなことを経験しながら、自分のペースで進んでいいと思います。失敗したこと自体が経験になりますから失敗を恐れすぎなくていいんですよ。それから、一番大事なのは健康でいることです。体も心も元気であることが、結局は学びや挑戦を支える土台になります。焦らず、自分の時間をちゃんと使ってほしいです。

感想

情報工学科2年 井上 満瑠

物理学等の授業で先生のお話を聞くことはありましたが、先生自身の研究や、先生の物事に対しての見方考え方も質問を通して垣間見ることができて、とても有意義なインタビューであったと感じました。また、物理法則の日ごろの生活での活かし方に、騙されないように自分を守るという、セキュリティの面もあることも自分の心にとめておきたいと思っています。

情報工学科2年 大石 隼士

先生自体は比較的新しい分野を研究されていますが、所々で先人の考えを例に出されていたり、古代ギリシャからの繋がりを説明されていたりと、歴史の積み重ねを大事にされているのかなという印象を受けました。先生の時には休んだり、遠回りをしたりすることも大事という考えは、これまでの人生で何となく感じていたものの焦りを感じてしまい実行しづらかったのでこれからはこの考えを胸に刻んでメリハリをつけてしっかり休んだり、いろんなことをやったりしていきたいと思っています。



社会環境学部・社会環境学科

上杉 昌也 准教授

研究分野：地理学

主な担当科目：空間情報学Ⅰ、空間情報学Ⅱ、環境地理学、地域デザイン論、フィールドワーク



1 Q 授業を行う上で大切にしていること、特に意識していることは何ですか？

A 授業では、主に二つのことを大切にしています。一つは、難しい内容でも分かりやすく伝えることです。受講生が知っている**身近な具体例**（例：福岡の地図、バスの本数など）を出すことで、抽象的な内容でも具体的なイメージを持ってもらい、興味関心を引き出すように工夫しています。もう一つは、「分かる」だけでなく、「ちゃんとできるようになる」ところまで意識して取り組んでもらうことです。頭で理解したことを、演習などを通じて実際に手を動かして再現できるようにすることを重視しています。

2 Q SNSや発信活動を行う上で意識していることや、始めたきっかけを教えてください。

A SNSは行っていないですが、論文執筆、学会発表、市民向けの講演などが主な発信活動です。最も意識しているのは、**発信の受け手に応じて内容を切り替える**ことです。例えば、市民の方々への講演では「自分の命に関わること」など、日常生活に直結する情報を分かりやすく伝えることを意識します。一方、論文や学会発表では、**新しい発見や研究手法**を専門的な視点で正確に伝えることを重視しています。聴衆の年齢層や求めている情報に合わせて、同じテーマでも話す内容を工夫しています。

3 Q 教員という仕事をしていて「やっていて良かった」と思う瞬間はどんな時ですか？

A 最も「やっていて良かった」と感じるのは、**学生の成長が見られた時**です。以前はできなかったことが、努力や学びを通じてできるようになる瞬間に喜びを感じます。大人数での授業では全員の成長を把握するのは難しいですが、熱心な学生や小テストなどの結果を通じて、**学生の変化や進歩を確認**できると、教員としてのやりがいを感じます。

4 Q 災害に関するゲームアプリを開発しようと思ったきっかけを教えてください。

A もともと私は防災が専門ではありませんでした。以前社会環境学科に防災を扱っている先生がいらっしゃいました。その先生が防災に関する知識を使用し、私が地理情報に関する知識を使用して、一緒に防災について学べるゲームを制作していろいろな人に防災について知ってもらおうとなったのがきっかけで開発を始めました。クイズ部分等の中身に関してはゼミ生などの学生にも協力してもらいました。

5 Q ゲームやアプリを通じて学生や一般の人にどんなことを伝えたいですか？

A 防災に関するアプリなので防災を日常的に考えてほしいという思いがあります。また、私の専門が地理学なので地理学の重要性を知ってほしいです。例えば防災に関していえば、ここは危ない、ここは比較的安全だと丸暗記するよりも、**災害のリスクが高いのはどのような地理かという風に理論を知っていれば知らない土地で突然災害が起こるとなったとしても臨機応変に対応できるのではないのでしょうか。**

6 Q 都市地理学という分野の面白さや魅力は、どんなところにあると思いますか？

A 例えば、私の趣味の街歩きをしていて街の移り変わりを感じたときに、なぜこの辺の街の移り変わりが激しいのと同じ規模の別の都市ではあまり変化がないのだろうかというのを研究するのが都市地理学というものです。防災の件でもそうですが**普段の生活の中に関わっているというのを感じます。**なので都市地理学を勉強すれば身近なことについて学問の側面から考えられるというのが面白さだと思っています。



7 Q ご自身の研究が、現代社会の どんな課題解決に役立つと 考えていますか？

A 私の研究（都市地理学、GIS、防災アプリなど）は、現代社会の複数の課題解決に役立つと考えています。特に防災の分野では、「防災GO」アプリを通じて、防災への興味関心向上や、災害リスクの高い場所を把握し適切な行動をとる能力の育成に貢献しています。また、専門であるGIS（地理情報システム）は、Googleマップのように既に広く活用されており、**情報化社会の基盤技術**として生活の利便性向上に役立っています。都市地理学全体としては、直接的に個人の生活に直結するものではないものの、その知識が防災やまちづくりといった分野で間接的に役立っています。

8 Q 学生時代に特に力を入れていた ことはありますか？

A 学生時代は、アルバイトや勉強に取り組みながら過ごしていました。特に、税務署でのアルバイト経験があります。これは、確定申告の時期に窓口で書類提出の対応などを行うものでした。大学院に進学し、修士課程（2年）を経て、その後一度社会に出てまちづくりコンサルタントとして働きましたが、さらに研究を深めたいと考え、博士課程（3年）に進みました。

9 Q 子供の頃の夢や今の仕事に つながるような原体験はありますか？

A 子供の頃から「歴史に関わる仕事がしたい」という漠然とした思いを持っていました。高校時代は世界史を専攻していましたが、大学に入学後、従来の学びにとどまらず、様々な新しい学問に触れる機会を得ました。特に高校時代には本格的に触れていなかった**地理学**やGIS（地理情報システム）の奥深さと面白さに気づき、これが現在の専門分野へと進むきっかけとなりました。特定の経験から直接今の仕事につながったわけではなく、大学で新しい学問を貪欲に追求する中で、「これ面白いな」と感じた探求心が、現在の研究と教育活動の原点となっています。

10 Q 普段リフレッシュをしたいとき、 どんなことをされていますか？

A 普段は**街歩き**をしてリフレッシュしています。歩くのが好きで、旅行というほどではない近場でも、積極的に歩くようにしています。特に、福岡の街中は一年や二年で景色ガラッと変わるなど、変化が早いので、そうした街の変化を見るのが面白いと感じています。出張や用事などでどこかへ行った際も、すぐに帰らず、ちょっと一回りして街並みを観察することが多いです。これは運動にもなり、新しい発見があるため、好きなリフレッシュ方法です。

11 Q 学生のうちにやっておくべきことは ありますか？

A 一つの分野に特化することも重要ですが、**複数の学問を学ぶ**ことは大きな強みになります。例えば、文系である社



会環境学科の学生がGISを習得するだけでも有利ですが、それに加えて経済や法律の知識も持っていると、技術的な側面だけでなく、社会的な文脈でその知識を活用できるようになります。実際に、GISの技術職に就いた卒業生が、経済の知識を活かして固定資産評価の仕事で評価された事例もあります。専門性を持ちつつ、**幅広い知識を持つ**ことで、就職の幅や活躍の場が広がります。

感想

社会環境学科2年 工藤 心晴

普段お世話になっている先生に改めてお話を伺う機会となり、先生の新たな一面や、研究に対する熱い思いを知ることができて、とても嬉しかったです。また、ゼミで学んでいるGISや空間情報学が、今後私たちの生活において欠かせない領域であることを改めて実感し、より一層学びを深めたいという気持ちになりました。

情報工学科2年 大石 隼士

今回のインタビューで先生の趣味が研究につながっているという事と、自身の研究分野が好きなのだという事をすごく感じました。普段の活動が研究につながるというのは情報工学でもあると思うのもっといろいろなことに挑戦して、いろいろなところにアンテナを張っていきたいと思いました。

情報通信工学科1年 角田幸太郎

今回上杉先生に教員インタビューを行って、他学科について今まで知らなかったことや疑問に思っていた事などを知る事ができました。今まで社会環境学部とは関わりも少なく、学習内容を知る機会がなかったですが、インタビューを経て地理学や防災に関連した分野に取り組んでいると知り興味が湧きました。また、先生の世の中の見方・考え方などを聞いて、これから街を歩く際には街の様子や地形等を気にしながら歩いてみたいと思いました。

情報システム工学科2年 中園 巧人

私の所属する情報システム工学科と社会環境学科の違いを考えながらインタビューに臨むことができました。インタビューを通して、先生方が普段何を想って講義を担当されているのかを知ると、より受講する時は身を引き締めないといけないと思わされますね。

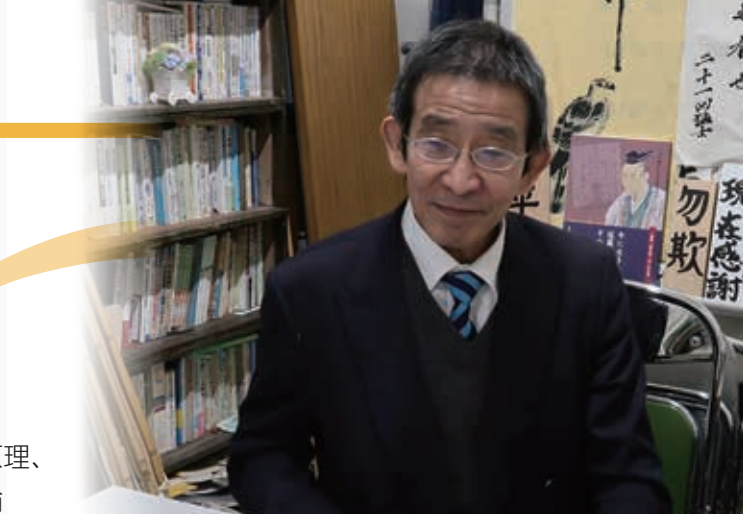
最近は電車やバスに乗るや否やすぐにイヤホンをしてスマホに夢中な人が多いですが、毎日利用する区間ならともかく、普段とは違う場所なのであれば景色を見ることをもっと楽しめるようになると、より感性が豊かになるのかもと思います。

教養力育成センター

上寺 康司 教授

研究分野：教育学、教育行政学

主な担当科目：人間存在と環境、現代倫理、教師論、教育原理、生徒・進路指導論、教育行政学、道德教育論



1 Q 授業のときに一番大切にしていることを教えてください。

A 学生時代に「もっと早く知っておけばよかった」と感じたことを、今の学生にはできるだけ伝えたいと思い、授業をしています。知識や心構えは、その時すぐに役立たなくても、必ずどこかで生きてくる。だからこそ、学生が将来思い出せるように、耳に残る言葉として伝え続けたいと思っています。授業では、腹から声を出し、滑舌を意識し、マイクがなくても届く明瞭な話し方を心がけています。私語があれば注意し、座席指定を行うなど学習環境の整備にも取り組むだけでなく、教職課程の授業では時間厳守や体調管理、姿勢の大切さを伝え、授業を通して学生の成長を支援していきたいと考えています。

2 Q 佐藤一斎を研究しようと思ったきっかけを教えてください。

A 哲学を学ぶ意義は先人の教えを学び、自分のあり方・生き方に活かすことです。私も精神的な弱さで悩むこともあり、佐藤一斎の教えは大学院で学んだテキストなどにも載っていたのに、古典的なものという感想しかなく忘れていました。そんな中教育実習などで全国を回っていた時、和歌山・御坊駅の書店で、西郷隆盛が心酔して読み込んだ『言志四録』を紹介する本に出会い、「今すぐ読みたい!」と心を動かされました。神奈川・横浜でついに見つけた『言志四録』のうち『言志録』の冒頭に、『凡そ事を作すには、須らく天に事うるの心有るを要すべし。人に示すの念有るを要せず。』とあり、意識すると「天というのは自分の心、自分の誠。だから自分自身と向き合って、自分の真の評価者は真実の自分である。」というもので、雷に打たれたような衝撃を受けました。読み込んでいくと、指導者のあり方、学びのあり方もたくさんあり、佐藤一斎の教育思想や学習思想を教材に取り込んでいきました。例えば、『春風を以て人に接し、秋霜を持って自ら慎む。』というものがあり、「春風のように人に接し、秋の周りを枯らすような冷たい厳しい環境に自らを置き、慎む。」というもの。相手に良い影響を及ぼす、春風のような穏やかに爽やかに人を受け入れる気持ちはオーラや存在感になりますが、存在感だけで人に良い影響を及ぼすというのは教育の究極の姿です。このような内容が、佐藤一斎の『言志四録』に満ち溢れています。

3 Q 教員が社会に与える影響について、どう考えていますか？

A 授業でも伝えますが、教員は社会的信用と信頼に裏付けられること、そして保護者や地域を含めた社会全体にとって尊敬に値する存在であり続けるために努力しないといけません。例えば保護者に医師や弁護士がいても、教育のプロ性においては一目置かれる存在として自分の教育的な哲学・信念をきちんと保護者に伝え、信頼関係を構築する必要があります。昨今の教員による犯罪の報道は、本当に情けない話です。今の社会が昔よりもひどいというよりは、「ガラス張り」になった感じですけどね。時代に関係なく、人間としてよりよく生きる努力をし続けなければなりません。

4 Q 教職に長らく携わってきたその熱意の源を教えてください。

A 私も大学生として経験した昔の大学の講義は、教員がマイクを使って大講義室で一方的に話し、学生は出入り自由という状況だったので、私は大学の教員と学生の間には教育的な関係は成り立たないと思っていました。私が33歳で初めて大学教員となった時、学生とは大して年が離れているわけではないのに「幼いなあ」と思っていたこともあり、学生のために一生懸命やらないといけないなと思うようになりました。そして、徐々に学生との教育的な関係性も構築できることを実感するようになりました。目の前の学生に対してなんとかしてあげたいという熱い気持ちとともに厳しく接する中においても学生を可愛がり、絶対に見捨てないことが大事だと考えるようになりました。

5 Q 教職課程を履修しようと思ったきっかけを教えてください。

A もともと教職課程については、戦後に大学教授を務めた師範学校出身の父、兄も教職課程を履修していたものの、自分には向いてないと思っていました。

入学した関西学院大学経済学部では、英語の教職課程も履修することが出来ましたが社会の教職だけを履修しました。（今思えば、英語も履修すればよかったなと思いますが。）教職課程での初めての講義である「教育原理」を受講していたところ、経

済に比べたら教育の話は分かることもあり非常に魅了されていきました。「教職が面白い」「教育学が学びたいな」と思うようになりました。

6 Q なぜ学校の先生ではなく、大学の教授として教職課程に携わろうと思ったのですか？

A 私の大学生時代は校内暴力などの学校荒廃という問題があり、これをマクロなレベルで解決に向けて取り組みたいと思ったからです。

下関にある東亜大学に赴任してからは、剣道部の顧問・監督もしつつ自分の理想とする教員養成をしようという決意を固め、学生に向き合い教員養成に励みました。福岡工業大学でも学生1人1人にしっかりと向き合い、「柔軟でタフな精神を持ち、生徒のために具体的に動く教員」になってもらいたいと考えています。

7 Q 趣味や毎日やっていることを教えてください。

A 趣味は剣道です。木刀による千本素振りを1580日以上継続してきました。

大学生の時に武道を始めたいと思い剣道部に入りましたが、初段を習得した後、逃げるようにして辞めました（笑）。4年生の前の春休みの約1ヶ月間、YMCAのボランティアリーダーとしてフィリピンで活動したのですが、国際交流の時に日本人としてのアイデンティティを明確にするため日本の伝統文化を体験できる何かが必要だと痛感し、剣道を再開。今日まで継続し、一般の剣道家としては最高位の教士七段審査に53歳で合格しました。剣道は道場だけでなく日常生活も修行の場。自らを鍛え練り磨き、人間的な成長を図ることができます。

8 Q 先生の得意なことと苦手なことを教えてください。

A 得意なことは文系的思考や話すこと、新しいプログラムを企画することです。教職課程でも、特別プログラムを企画することがあります。もう1つは、自分が直接体験したこと、テレビ番組や人から聞いた話などを基に授業の教材を作って、教育的な価値を付与しつつアクションをつけながら臨場感をもって語ることです。

苦手なことはパソコンの操作です。大学院生の時に当時最新のパソコンを買いましたが、ずっと一太郎の基本機能しか使えません。パワーポイントも時々使いますが、大きな文字の迫力に頼っています。

あとは整理整頓です。古い書類も雑誌も、大谷翔平がラベルに刷られたペットボトルや記念でつくった割れたコップも残しています（笑）。



9 Q 子供の頃の夢は何ですか。

A 特に将来何になりたいとかは無かったですね。「強い男」になりたいとは思っていませんでした。小学生のとき、姉のピアノ教室の先生が私の手相を見て「君は良い手をしている。世界を、海を渡る」と言われたことをきっかけに、バイオリンを習い始めました。ただ、「男が音楽をするのは軟弱だ」という今では偏った考えにより、中学生になり辞めました。

当時は「男は男らしく」という雰囲気があったこともあり、小学校5年ぐらいの『おれは男だ!』という剣道が中心の青春ドラマが流行ったり、空手ブームがあったりという中で、「強い男」になりたいとは思っていませんでした。

10 Q 学生に向けてアドバイスをお願いします。

A 学生には、ぜひ何事にも挑戦してほしいと思います。その際には誘惑や危険な誘いに注意し、自分で正しい判断をしながら多くの経験を積んでほしいと思います。また、多様な世界や分野で活躍している人と関わることは、価値観や考え方を大きく広げてくれます。「本物」の人の話を直接聞くことが理想ですが、難しい場合は本を読むことでも学びは得られます。特に、困ったときに自分を立て直す力を与えてくれる本を手にとってほしいですね。失敗や空振りを恐れず、積極的に行動することで、大学生活ならではの貴重な経験が得られます。リラックスしながらも、全力で取り組んでほしいと願っています。

感想

情報システム工学科2年 中園 巧人

教職課程も受け持つベテランの上寺先生の、これまでの人生経験や考えを直接聞くことができ、大変有意義な時間でした。長く続けてきた剣道や、これまでの挫折した経験もすべて活かして今を生きている様がカッコいいと感じました。私も先人の教えを吸収し、信念を持とうと思います。インタビューさせていただき、ありがとうございました。

情報工学科2年 井上 満瑠

先生は、自分のモットーやこれまでしてきたことなどを堂々と話されていて、私も先生のように自信を持って伝えていけるような人格者になりたいと思いました。また、日本の伝統文化や先人の教えに触れることも大事であると深く学ぶことができました。

情報工学科3年 宮崎 桜花

私は教職課程を履修しており、上寺先生には沢山お世話になっています。授業で教師として大切なことを日頃から学ばせていただいています。

そして今回のインタビューでは、上寺先生についてより詳しくお話を聞くことができ、とても勉強になりました。鍛え練り磨き続けることや、先人の教えを学ぶことの大切さを学ぶことが出来ました。

インタビュー、ありがとうございました。

2025 学生アンケート



対象者 本学すべての学部生、大学院生、短期大学生
回答期間 2025年6月18日(水)～7月9日(水)の3週間
実施方法 Microsoft Office Forms
設問数 20件
回答件数 482件



調査の結果

昨年度の活動を踏まえ、「つながりがある人は、充実した学校生活を送れるのではないか」という仮説を立てました。その上で設問を考え、アンケート収集をし、その仮説がどのくらい当てはまっているかを検証しました。

アンケートの最初に学生生活が充実しているかを聞いたところ、全体の9割の学生が「とても充実している・充実している」と回答をしていました。その理由として「友達ができて楽しい」「学びたいことが学べる」「やりたいことに挑戦できる」との回答が多かったです。

アンケートで設けた設問の「充実度と教員と話す機会があるか」と「充実度とどのような場所で話す機会があるか」をクロス集計しました。その結果「充実している学生ほど、教員と話す機会がある割合が高い」「充実度関係なく、授業前後・講義内で教員と話している学生が多い」ということがわかり、この2点から「人とのつながりがある人は、充実した学生生活を送ることができている傾向にある」とことがわかりました。よって、教員と話す機会が今よりも増えると、充実した学校生活を送れる人が増えるのではないかとこの考察に至り「**教員と話す機会の拡充（提案①）**」を提案することにしました。

この提案が実現すると、教員と話す機会があることで授業内容の理解がより深まりやすくなったり、教員の人柄を知ることで日常生活のことや、進路についてなど相談しやすくなり、教員とのつながりが増えたりすると思い、提案しました。

目的

学生がよりよいキャンパスライフを送るために、学生の意見を教職員に届け、教職員と学生の懸け橋になることを目的としています。

今年度は「つながり」に焦点を当て、学生同士や教職員の間によりよい関係性を築くための提案を行うことで、学生生活の充実度向上に繋げることを目的としています。

教職員へのお願いと提案内容の要約

提案①：教員と話す機会の拡充

具体案：講義の冒頭5～10分または、講義終了5～10分前に、教員に質問・交流できる機会を設ける

提案②：友人との協働学習を可能にする場の拡充

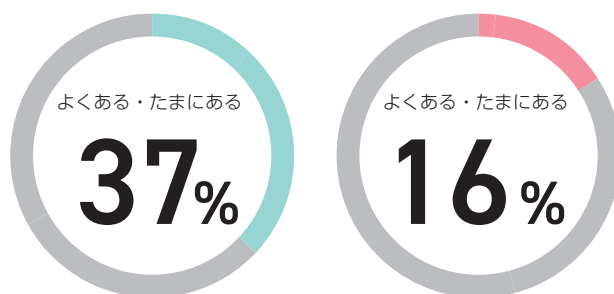
具体案：交流や協働学習しやすい勉強場を増やす
 (例：コンセント設備、グループ内学習用の席の追加)

Q1. 現在の学生生活は充実していますか？



Q2. 教員と話す機会がありますか？

「とても充実している」「充実している」と答えた学生
 「あまり充実していない」「充実していない」と答えた学生



「とても充実している・充実している学生」と「あまり充実していない・充実していない学生」で分け、学習場所を選んでいる理由を分析しました。その結果「充実していると回答をした学生ほど、交流目的で勉強場所を選んでいる割合が高い」ということが分かりました。この結果から「活かせる環境を持ち合わせている人は、充実した学生生活を送ることができている傾向にある」ことが分かりました。以上より、交流や協働学習しやすい設備を持つ勉強場所を増やすことで、より多くの学生が充実した学校生活を送れるのではないかとこの考察に至り「友人との協働学習を可能にする場の拡充(提案②)」を提案することにしました。

この提案が実現すると、グループ学習する機会や、交流の時間が増やすことができ、充実度が高まると思い、提案しました。

📎 アンケートを分析した上での感想

アンケートの分析から、学生は想定以上に「教員と話す機会を持ちたい」と感じていることが分かりました。また、教員との交流機会が増えることで、学生生活の充実につながる学生も多いことが確認できました。そのため、今後はすでに実施されている教員と学生が交流できるイベントの周知を強化したり、新たな交流イベントを企画したりすることで、教員と話す機会をさらに拡充していきたいと思います。



📝 Q3. 学習場所を選んでいる理由

消極的理由

32%

「とても充実している」
「充実している」
と答えた学生



交流目的

68%

消極的理由

90%

「あまり充実していない」
「充実していない」
と答えた学生

交流目的

10%



アンケートミーティングの様子



学生アンケート発表



学生企画の様子

新入生 オリエンテーション

*Freshman
Orientation*



目 的

新入生オリエンテーションは、「主体的な学びへの動機づけ」と「学びの仲間づくりのきっかけ提供」を目的として実施されています。

私たちはその中でも、新入生同士が仲間をつくる部分を担当しました。

これからの4年間で支え合える友達をつくってほしいという思いから、アイスブレイクや学内探検の企画・運営を行いました。

また、昨年度の新入生アンケートの結果をもとに内容を見直し、昨年の反省点を踏まえてより良い企画となるよう改善を重ねました。

実施内容

*アイスブレイク

新入生オリエンテーションの目的の中でも、特に「学びの仲間づくりのきっかけ提供」を重視し、アイスブレイクの企画を考えました。

アイスブレイク担当チームでは「昨年の内容をさらに良くしたい」という思いが共有され、思い切って内容を大きく見直すことにしました。

その結果、チーム全員で意見を出し合いながら、新しく“他己紹介ゲーム”を取り入れることに決めました。

*学内探検

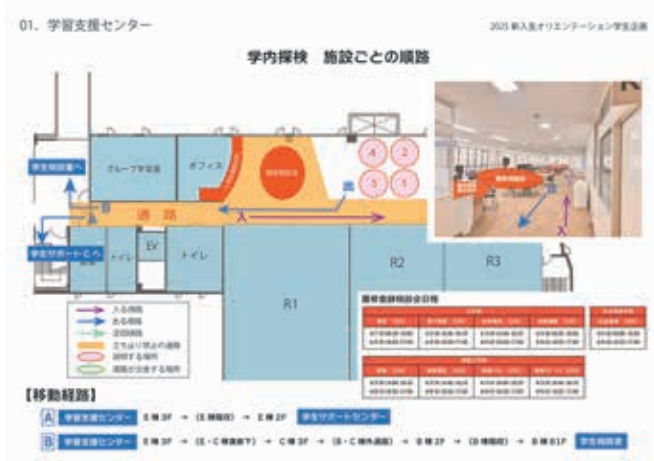
学内探検は、新入生が実際にキャンパスを回り、各場所で何ができるかを理解することを目的としています。さらに、学科の仲間との交流を深めてほしいという思いから、チームで協力しながら探検できるよう、さまざまな工夫を重ねました。具体的には、チームで相談しながら答えを導くクイズ形式のゲームを取り入れ、自然とコミュニケーションが生まれる仕掛けにしました。また、スムーズに探検が進むように、移動ルート（導線）も丁寧に設計しました。



オリエンテーションミーティングの様子



オリエンテーションミーティングの様子

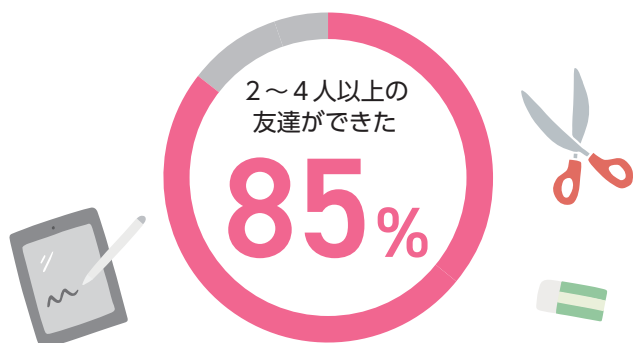


学内探検マップ

*新入生オリエン（企画した学生の振り返り）

新入生からの企画に対するアンケートは以下の結果となりました。

Q. 新入生オリエンテーションに参加したこと、今後も話ができそうな友達はできましたか？



新入生の85%以上が「2～4人以上の友達ができ」と回答してくれました。この結果から、今回の企画はしっかり目的を達成できたと考えています。また、私たち企画メンバー自身も、より良いプログラムにするために何度もミーティングを重ねる中

で、チームで協力して一つのものをつくり上げる楽しさを実感することができました。新入生オリエンテーションは毎年行っていますが、これからもさらに楽しめる企画へと改善していきたいと思っています。次回もぜひ期待してください！

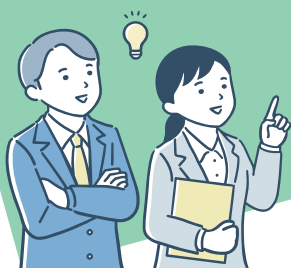


学内探検



学生スタッフ

Join-Talks



Vol.
5



目的

Join-Talksとは、発表者が興味や関心のあるテーマについてスピーチを行い、参加者が自身の専門分野を越えて視野を広げることの大切さや面白さを知り、学生が発表する際には発表者自身も意見や考えを発信する力を高めることを目的としたイベントです。今年度の学生アンケートの結果から「企業との面接」に関心を持つ学生が34%と最も多かったため、テーマを「面接」に設定しました。

実施内容

12月5日（金）に第5回Join-Talks「企業が求める人材と大学の学び」を開催しました。講演には学生23名と教職員を合わせて31名の方々にご参加いただきました。講師の方からは企業が面接で重視するポイントや大学の学びの活かし方について、先輩方からは就職活動の経験や自己分析の具体的な仕方についてご講演いただきました。参加者は自己分析シー

トを使い、学生時代の課題と目的に対してどのように解決したのか、成し遂げて何を得たのかを掘り下げ、グループ内で共有しました。今回のJoin-Talksを通して、学生が自身の面接や自己分析に対する考え方を見直すきっかけになったと思います。

講演では、面接は「堅苦しい試験」ではなく「企業と学生が互いを理解するための対話の場」であること、そして自分自身を理解してもらうために自己分析が重要だということを学びました。

参加者の声

- 企業側のリアルな視点を知れた
- 自分の強みを引き出す重要性を感じた
- 自分の言葉で書くことの大切さを改めて感じた
- 自己分析することで就きたい業界が明確になることを知れた
- 今実際にしている就活が間違っていないかどうかを確認できた



交流会 プロジェクト

目的

交流会は今年度から新たに始めた活動の一つです。学年や学科の異なるメンバー同士が円滑にコミュニケーションを取り、FIT-joinの活動をより活発なものにすることを目的としています。普段の大学生活では関わる機会の少ない人同士が交流することで、意見を出しやすい雰囲気づくりやチームワークの向上につなげることを目指しています。

活動内容

1

全体会議でのアイスブレイク

FIT-joinには学年や学科が異なるメンバーが多く、普段の大学生活では関わりのない人同士で活動します。そのため、全体会議の最初にアイスブレイクを行うことで緊張をほぐし、お互いのことを知るきっかけを作っています。また、自分の意見を伝えやすい雰囲気づくりにもつながるため、全体会議の中で継続して実施しています。



活動内容

2

BBQ

毎年6月から7月頃に学内の施設を借りて、FIT-joinのメンバーでBBQを行っています。今年からは交流会が担当することとなり、新メンバーにとってはFIT-joinのメンバーとの初めての大きな交流の機会となり、リラックスした雰囲気の中で交流を深めることができました。



活動内容

3

湯布院研修でのアイスブレイク

湯布院研修の最初にアイスブレイクを行いました。60分間という長い時間を活用し、班替えを行ったり複数のゲームを用意したりすることで、多くの人と交流できるよう工夫しました。アイスブレイク後のワークショップでも話しやすくなるよう企画しました。



活動内容

4

ボウリング大会

今年から交流会独自の企画としてボウリング大会を実施しました。ボウリングは得意・不得意に関係なく誰でも気軽に楽しめるスポーツであり、自然と会話が生まれると考えたためボウリングを行うことにしました。この会を通して、これまであまり関わりのなかった人同士が交流できる機会を作ることができました。



感想

交流会ではさまざまなアイスブレイクを企画しました。その結果、学年や学科に関係なく多くの人と関わることができたと感じています。自分たちが考えたアイスブレイクを通して、参加者が楽しんでくれたり笑顔になったりする姿を見ることができ、この活動を行ってよかったと強く思いました。非常にやりがいのある活動でした。





つながる

未来を創造しよう

人生や社会の未来を考えるうえで、過去を振り返ることは重要です。

毎年発行している FutureDesign も一年間の活動を振り返るとともに、その成果を次年度につなげる役目を持っています。

Vol.9 となる本誌は「様々な人が関わっている」ことを意識した広報紙に仕上げました。

表紙では木を幾何学的に表現し、学生の持つ成長性と協調性を描いています。

活動報告では FIT-join の活動の中からいくつか取り上げ個々の活動をより詳しく紹介しました。

最終ページでは FIT-join の雰囲気を感じていただくために多くの写真を掲載しています。

FIT-join では、今後も学生の視点でより良い学校づくりに取り組んでいきます。

そのために、2026年度の新メンバーを募集中です。

少しでも興味をもっていただけた方は、ぜひご参加ください。



活動の詳細をチェック!!
公式インスタグラム随時更新中!

編集・制作： **FIT-join**

FIT Fukuoka Institute of Technology
福岡工業大学

発行元：福岡工業大学 教育開発推進機構

〒811-0295 福岡市東区和白東3-30-1 E棟3階

TEL：092-606-7370 FAX：092-606-7379

Mail：e-kaihatsu@fit.ac.jp Web：http://www.fit.ac.jp/

発行日：2026年3月17日

編集・作成：FIT-join(学生FD)・教育開発推進室・FutureDesign制作チーム